

# 蓮



# 光

菊蓮寺だより

第六十七号

令和二年四月

春田鋤く土のしめりを陽に返し

樋口英子



しゃぼん玉吹く子掴む子後追ふ子

桜 敏子



にゆうがくしきパパもこうかをうたつてる

吉田星哉 (小1)



父母に見せたき今朝の桜かな

八木下末黒



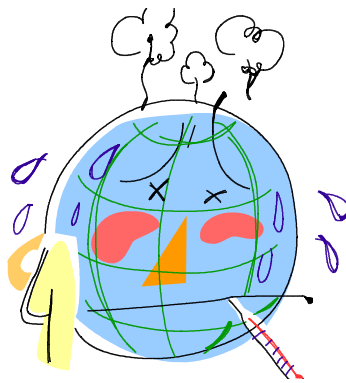
今年は何年にもない暖冬で、外の水道が凍ること、ほんの数回、勿論川に氷が張ることなどありませんでした。私の子供の頃は、氷が張り詰めた川や田んぼで、皆でスケートをして楽しんでました。氷の縁が融けて厚さ十五cmぐらいの「氷のいかだ」ができる、竹の棒で操りながら、いかに落ちないで乗っていられるかを競ったりしていました。



ここ三十〜二十年くらいは川に張った氷に石を投げて、バリーンと割れるか、ジュボットと突き刺さるか、それともカッスンと弾かれるか、息子達と楽しんでいました。それが、今年はいよいよ川にひとつも氷が張らない?!と思っていま

したが、立春の後の寒波で、全面氷結はしなかったものの、真ん中を残して両岸には薄く氷が張りました。

ただ、地球温暖化が叫ばれて久しいですが、ホントなのかなあ、としみじみ実感します。今年の夏は一体どうなるのか心配です。そして、子どもや孫、後の世代はどうなってしまうのでしょうか……。



昔も、と言っても十年百年の話ではなく、数千万年、数十億年という歴史を考えれば、この地球は氷河期もあれば、ものすごい高温期もあったはず。その中で、地球上に生まれた生命は、耐えて耐えて生き延びて、いのちを繋いできてくれたのです。本当にすごいことです。



いのちは、自分だけポコッと生まれたわけではありませぬ。前から繋がって、繋がって、繋がって、繋がって、繋がって行くのです。ですから、今自分たちが享受している幸福だけを追求するのではなく、後に続く子ども達、その子ども達の為に、大切な環境と資源を考えに入れていかないと、大変なことになってしまいます。

次の詩は小学校一年生が書いたものです。

「なんばんめ」 小学校1年 熊田 亘

おかあさんは  
なんばんめに生まれたの?  
(東京のおばちゃんが  
一ばんめだから  
二ばんめよ)  
ちがうよ  
にんげんが海から生まれてから  
おかあさんは  
なんばんめ?

思わず唖ってしまふ詩ですね。大人が、普段は考えもしないことに気づく子どもの目は本当に鋭いです。同じような指摘があるお坊さんも受けました。

師僧「君の歳はいくつだい?」

弟子「三十二歳です」

師僧「本当の歳だよ」

弟子「数えて三十三歳です」

師僧「いやいや本当の歳を聞いているんだよ」

弟子「え?ええと、当年(十年)取って、二十

二歳です!」

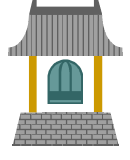
師僧「ばか者!」

「君がここに居るのは、両親がいて、祖先がいて、その生命の源をたどれば、この地球に最初の生命が生まれたおかげ。地球が出来たことよって授けられた生命なのだから、君の本当の歳は地球と同じ。ひいてはこの大宇宙と同じなんだよ」

一度も切れることなく繋がっている命の鎖、命のバトンを受け継いでいる、それが私の命です。春のお彼岸、お盆、秋のお彼岸、お正月、御先祖を想い、命の繋がりに感謝し、お参りとお念仏ですね。



# 令和最初の大晦日の鐘



～昼間の部・夜の部実施しました！

「除夜の鐘」が始まって、今回で4回目となりますが、「大晦日の鐘」として昼夜二部制にして3回目となりました。今回は、平成から令和に変わり、最初の鐘。赤土地区と旧山方町地区（照山・小貫・山方・西野内・諸沢）の役員の皆さんが中心になって御奉仕下さいました。お寒い中ありがとうございました。



鐘を撞きにいらした方には、「金のチョコレート」と家族毎に「祝い箸」、そして温かい甘酒と麦茶、それから何よりも役員さん方の温かい「O・MO・TE・NA・SI」がふるまわれました。二部制にして3回実施してきた「大晦日の鐘」すが、役員会で令和2年からの実施方法もまたより良い方向へ向けて検討していきたいと思ひます。



《愛の募金》毎年御協力ありがとうございます。



令和元年12月1日（日）  
茨城新聞掲載記事



日などで寄せられた浄財。渡辺本治総代長、鴨志田勝美副総代長、猿田功副総代長、安西住職、写真右から、常陸太田支局に届けた。

常陸太田市上宮河内町の菊蓮寺（安西仁人住職）が9万8504円。3月の開山忌や8月の施餓鬼会、千手観音縁

毎年、皆様からの御浄財を茨城新聞に寄付しています。今年は、洪水被害等もあり、より多くの皆様から温かい御協力を頂きました。改めまして感謝申し上げます。これからもどうぞよろしくお願い致します。合掌。

# 読者の声

「俳句」

常陸大宮市 南都雄慈

## 吊し雛梁八角の手斧掛け

「梁」「手斧」は〈ナントユウジ〉でしょうか？

「梁」は「はり」と読み、家の上部の水平の部材です。「手斧」は「ちような」と読み、昔の大工の道具で、今は廃れてしまつて、見ることはほとんどありません。「手斧初め」とは、大工さんの新年初めて仕事をやる日の儀式で、それ程大事な道具だったので。

季語「雛へ春」

吟行場所 那珂市役所前の香煙の古民家

(毎年雛飾りの行事があります。)

自画自賛

ひな祭りの俳句は、掃いて捨てるほどあるので、雛が下がっていた場所、梁を強調しました。私の家も江戸時代の田沼意次が権勢をふるった時代に建てられたものなので、自然材の、上下左右を大きく、斜めの部分を小さく削った、八角の手斧掛けでした。この「八角の手斧掛け」によって、古く大きい木造住宅を連想させました。



## 冬木の芽仁王の腕に力瘤

季語「冬木の芽へ冬」

吟行場所 那珂市静 花の寺弘願寺

自画自賛

私は大宮俳句会(十名)に所属し、「対岸」という結社の主催の添削を受けています。元句は、大宮俳句会の選にも入りませんでした。「季語を、冬木の芽に替えたなら？」との助言を受け、作り直したものです。菊蓮寺住職が是非にと言うので提出したものです。(春がそこまでやって来ている明るい外と、仁王がある暗いお堂、みずみずしい木の芽と、何百年も千年も前から伝わっている木目が浮き出た仏像の木肌、ちよつと赤みがさした緑の木の芽と、乾いた枯木の仏像の色。)



けれど仁王の力瘤のように、ちっちゃいけれど、元気みなぎる生命の力がこもった「木の芽」という「力瘤」。怖い顔だけれど、仁王像が、優しくお堂の中から、これから萌え出する木の芽を優しく見守っている様子、たった十七文字で想像が無限に広がっていきます。いいですねえ！ 住職感想です。)



## 手に余る柚線香のやうな枝

季語「柚へ秋」

吟行場所 自宅

自画自賛

私の家には二本の柚の木があり、実の大小はあるものの、大きいものは今までになかったやうなものでした。しかし、枝はほとんどが細い枝でした。この表現として「線香のやうな」が良かったと思います。



## 落人伝説ひそひそと蕎麦の花

季語「蕎麦の花へ秋」

吟行場所 福島県檜枝岐村

自画自賛

水芭蕉で有名な尾瀬の、北の玄関である檜枝岐村。村の中央に、飢饉で餓死した人を祀る六地藏があり、平家の伝説を伝える檜枝岐歌舞伎があります。この歌舞伎を見たいと思うのですが、盆最中の八月十四日のため、見に行けないままです。世を忍んで生きた平家の落人と、一個ではあまり目立たない蕎麦の花を「ひそひそと」との中五で結んでみました。



《クイズ》

檜枝岐村は平家の落人が隠れ住んだ土地ですが、「平」を名乗っている家はありません。どのような姓を名乗ったでしょうか？ (罫 村 香)

## 奥久慈の高き鉄橋秋出水

季語「秋出水へ秋」

吟行場所 大子町上小川

自画自賛

上小川駅南側の久慈川に架かる鉄橋は、相当な高さがあり、秋の出水でも余裕さえ見せていました。この句はそんな状況を詠んだものです。しかし、台風十九号では、大子町も常陸大宮市も常陸太田市も甚大な被害を受けました。水郡線は鉄橋の橋脚が崩壊し、大子・袋田間は今でもバス輸送となっております。この句は、台風十九号によって注目されましたが、このような「怪我の功名」は無くしたいものです。

